

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No.62
2024 SPRING

目黒新学環長に訊く

—震災をめぐる組織論から、これからの学環・学府への展望— 目黒公郎 教授

2024年4月に新学環長・学府長に就任された目黒先生に、学環・学府の今後の課題と展望について語っていただきました。

また、合わせて1月1日に発生した、令和6年能登半島地震について都市震災軽減工学がご専門の立場からお話を伺いました。



—目黒先生は地震をはじめとするハザードが社会に与える障害の最小化、および災害発生時を地域の問題を改善する機会として有効活用するための、ハードとソフトの両面の対策に関する研究をされています。これまで内外の多くの災害現場へ足を運ばれていますが、1月1日に発生した能登半島沖の地震ではどのように動かされたのでしょうか？

今回私は後方支援に回り、現地入りして活動する仲間や関係省庁、地方自治体の皆さんに、想定される具体的な問題への配慮や対応をアドバイスするなど、復旧・復興に向けた活動がスムーズに進むように動きました。

日本の災害対応に共通する課題として、支援のあり方だけでなく、支援を効率的に受け入れて活用する「受援力」が挙げられます。現行の法制度（災害対策基本法）では、災害対応は市町村長がまず責任を持って行うことになっていますが、これを困難とする構造的な問題があります。平成の大合併で全国の市町村数は約半分の1,700余になりましたが、その規模は10万人以下の市町村数が全体の85%、3万人以下が53%、1万人以下が約3割です。合併により職員数も減り、現在500近くの市町村では災害対応部局には専任の担当者が一人もない状況です。さらに一部署での在任期間を考えれば、各市町村が災害対応の教訓やノウハウを蓄積することは無理です。これでは他地域から支援者や物資が入ったとしても、それを効率的に活用することはできません。この「受援力」不足に加え、人口や人口密度の低い地域では、被災者数は減っても、広く分散するのでその対応は困難になるのです。災害対応力の強化のための法制度の改定を訴えていますが、簡単ではありません。

—災害とは、全く違うお話ですが、学環・学府の現状を見るとき他山の石として考えるべき点もあるような気がします。

学環・学府は設立以来20年以上が経過し、さまざまな課題も見えてきました。教職員や学生の数にフィットした組織化ができているか？資源が限られる中で自ら仕事を増やして、エラーを発生しやすくしていないか？市町村の例でいえば、自力や体力に見合った仕組みを考えていないとか、局所最適解を狙いすぎで全体最適解から逸脱するような、構造的な問題が起きていないかを点検する時期であり、点検の結果、問題があれば、これを変革する必要があると思っています。

—具体的には、まず何を取り組みたいとお考えですか。

学環・学府のユニークさは、分野を超えた交流や融合が可能なことです。例えば工学系の教員はその組織の中では人文社会系や芸術系の学生に出会う事はほとんどないですが、学環・学府ではいくらでもあります。ここで生まれる人的ネットワーク、つまり、多様な分野や文化と相互に敬意をもって融合する関係はとても魅力があり、私はその融合を支える仕組みづくりに努めたいと思います。手前味噌ですが、私の所属するCIDIRではそれが実践できており、人文社会系と理工系の研究者や学生が同じ組織内で活発に意見を交換しています。

AIを取り巻く課題の研究なども、学環・学府が、学内で一番分野横断的に取り組めるものでしょう。情報理工的な分野は当然重要ですが、一方で法制度面での検討も不可欠です。AIが生み出す様々な成果の効果的な活用法、人間に及ぼす影響の評価と対処法などについては、学環・学府の中で分野を超えた研究ができます。理工系、人文社会系、芸術系、生物統計などを融合して社会問題に解決策を示すことが、現在の学環・学府のあるべき姿の一つではないでしょうか。また、学環の特色のひとつに、他の研究科・研究所等の教員が、数年の期間をもって情報学環に身分を異動する流動教員の制度があります。私は流動の教員たちが学環に来たからこそ出来る面白い教員や学生と協力して、元部局ではできなかった成果に繋がる環境作りに努めたいと思います。これによって情報学環も成果をあげることができると、元部局にとっても流動教員が新しい人的ネットワークや成果を持って帰ることは大きなプラスになり、双方にとって双赢の状況が実現します。学府の学生のみなさんには、自身の向上や成長のみならず、先生や周りの学生に刺激を与えて、これからの学環・学府を、ひいては東京大学や社会を大きく変えていくんだという意識を持って欲しいですね。

—パンデミックの3年間を経て、学環・学府のコミュニティのあり方についてはどういう展望をお持ちですか。

私はオンラインのメリットは保持しつつ、対面の機会を圧倒的に増やそうと思っています。アバターはいろんな可能性を秘めていますが、やはり人間はface to faceで歴史を作ってきたわけです。そういう点では、先ほど述べた融合を支える「仕組み」には、組織をめぐる大きな話だけでなく、人間単位のちょっとした工夫も効果的だと思います。海外の大学には毎日1時間ぐらいブレークタイムを設けて、教員から学生までみんなカップを持ち寄ってコーヒーと紅茶を飲みながら、お喋りする文化を持つところがあります。分野を超えたそのようなお喋りから、多くの新しいアイデアや成果が生まれるのです。ここで大事なのは、その時間帯には会議は入れないと、この時間が創造のために大切な時間だという意識を共有することです。学環コモンズは、まさにそういう目的に使うべきです。そこには、美味しいクッキーとチョコを用意して、あ、太っちゃうか（笑）。

私は学環・学府の人たちが交流する活動を積極的に支援したいと考えていますが、これを実現するには、学環・学府はもう少し財政的な余裕を持つべきです。東京大学を取り巻く環境も厳しさを増し、本部からの財政的な支援も減りつつあります。このような中では積極的に競争的資金を取りにいったり、社会と協働する活動を通じて研究資金を得る努力も必要です。私も精一杯努力しますので、皆様のご理解とご支援を切にお願いします。

聞き手：神谷説子（特任助教）、山内隆治（学術専門員）

写真撮影：柳志咲（博士課程）

〈取材日：2024年2月10日〉

ホームカミングデイ2023

2023年10月21日、東京大学ホームカミングデイトークセッション「コミュニケーションを再起動せよ」が開催されました。多彩な分野で活躍する、情報学環・学際情報学府に縁のある3人のゲストが登壇し、学環・学府で得た学びと現在の仕事との関係性、テーマである「コミュニケーション」をめぐり活発な議論が交わされました。

トークセッションにはノンフィクション作家で現在学際情報学府博士課程に在籍されている河合香織さん、学際情報学府修士課程を修了後エッセイストや小説家として活躍されている鈴木涼美さん、組織におけるファシリテーションを専門に情報学環特任助教を務める安斎勇樹さんが登壇されました。それぞれの異なる立場で「コミュニケーション」に関わる三者が、開沼博准教授のコーディネートのもと、コミュニケーションの可能性／不可能性についてトークを展開しました。

記事:荻堂志野(修士課程)



東京大学制作展2023 學藝運動

2023年11月16日(木)から20日(月)にかけて、「東京大学制作展2023 學藝運動」を開催しました。学際情報学府の講義の一環として開催されるメディアアートの展覧会です。コンセプト立案・展示制作・運営などのすべてを学生主体で担うのが大きな特徴で、今回で25回目を迎えました。本年は、過去最大級の29作品が全4会場に並び、のべ2200人以上の方にご来場いただきました。本展示では、「學藝運動」をコンセプトとして掲げ、学術と藝術を繋げることを目標に、各々が考える学術と藝術の融合を表現しました。11月18日には、東京工業大学の伊藤亜紗先生、美術家であり秋田公立美術大学の山川冬樹先生、そして情報学環の筧康明先生をお招きし、「学術と芸術の関係性」をテーマにトークイベントも開催しました。制作展を出発点として、学術と藝術について多角的な観点から豊かで示唆に富む議論が展開されました。

記事:島川久範(修士課程)



2023日韓台シンポジウム

“Mediating the World in the Digital Age: Politics and Culture of Technological Change”

2023年10月27日、東京大学大学院情報学環・学際情報学府、ソウル大学校社会科学大学言論情報学科、国立政治大学伝播学院が共催する国際シンポジウムが福武ホールで開催されました。4年ぶりの対面開催となった今回は、“Mediating the World in the Digital Age: Politics and Culture of Technological Change”というテーマのもと東京大学が主催しました。

シンポジウムは教員発表セッションと学生ポスター発表セッションで構成され、各大学より2名の教員と6-7名の学生が研究発表を行いました。またオーディエンスも30名以上参加し、多様な意見や議論が交わされました。シンポジウム翌日には、フィールドトリップとしてテレビ朝日を訪問しました。現役のベテラン記者に案内していただき、ニュース制作スタジオなどテレビ局内の様子を見ることができました。

記事: Priya Mu(博士課程)／日本語訳・編集:イミンジュ(特任助教)



第2回MeDi-B'AIシンポジウム

2023年11月25日(土)、第2回MeDi-B'AIシンポジウム「メディアとダイバーシティ——メディアに女たちの声は届いたのか?」が情報学環・ダイワユビキタス学術研究館にて開催されました。本シンポジウムは、2017年に発足した「メディア表現とダイバーシティを抜本的に検討する会(MeDi)」の6年間の活動成果を問い合わせるために企画されたものです。

第一部では、朝日新聞社やTBSテレビ、民放連など、メディア業界で活躍される方々をお招きし、各社の取り組みや日本のメディア業界におけるジェンダーギャップの現状と課題に関する議論が展開されました。第二部では、大学等の研究機関で研究されている方々が登壇され、メディア文化における性差別と性差別、AI時代のジェンダー表象などの課題をめぐり多岐にわたる議論が繰り広げられました。

記事:毛 雲帆(修士課程)・金 佳榮(特任研究員)





澁谷遊野

准教授

空間情報科学研究センターから異動してきました。都市空間での多様性や包摂性をテーマに、地理的・社会経済的不均一性を考慮した人々の行動シミュレーションや移動体データ等のデータを解析のほか、デジタル空間での情報流通やシビックテックなどの市民参加について研究に取り組んでいます。

Bregham
Dalgliesh

准教授

総合文化研究科より参りました。ケープタウン出身で、ブリティッシュコロンビア大学で修士号、エдинバラ大学で博士号を取得し、2002年からパリ政治学院などフランスで教鞭をとり、2012年に東大に着任しました。専門は近代哲学と科学技術研究です。知識を得ようとする意志を問題とすることから出発し、人間の条件を形成し、また制御もする事柄の関係性を歴史的に探求しています。



羽多野一磨

准教授

これまで電波政策や放送政策など情報通信技術政策に携わっていました。携帯電話に代表されるように情報通信技術は、次々に新しい技術が登場し、急速に社会実装が進みます。このような情報通信技術を安定的に発展させるために求められる社会展開方策、技術戦略、制度などの情報通信技術政策について研究を進めたいと考えています。



Lee Seohyun

助教

韓国出身で、2011年に日本に渡り、2018年に生物物理学分野の研究で博士号を取得しました。その後、情報理工学系研究科では様々なデータサイエンス技術を習得し、定量生命科学研究所では自然言語処理を用いたエピゲノムのパターン分析について研究してきました。これまでの幅広い領域での研究経験を生かし、科学技術コミュニケーション分野への貢献を目指しています。



小久保智淳

助教

憲法学と神経科学との融合領域的な学問である神経法学(neurolaw)を専門にしています。現在は、「認知過程の自由(cognitive liberty)」を導きの糸に、神経科学技術の研究開発・社会実装の規制と促進との適切なバランスを実現できる法学理論の構築や、「人格的自律」、「自由意思」等の法学にとって基礎的な諸概念を、神経科学や認知科学の知見に照らして再構成することを目指しています。



Huh Duim

助教

科学史・科学技術社会論の分野で、科学教科書・機器の歴史、科学者・教育者のアイデンティティについて研究してきました。博士研究では、20世紀半ばの日本における科学教育の政治性について研究しました。情報学環では、情報技術の歴史、冷戦期における外交と科学教育、土着知識と科学などについて研究していくたいと考えています。



森田崇文

助教

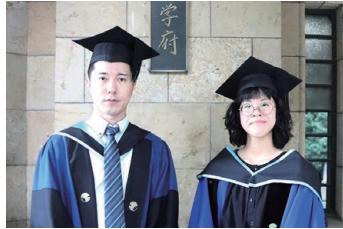
専門分野は、ヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)で、特に、材料科学の知見をコンピュータインフェースに取り入れ、物理的な実体を持つオブジェクトの形態や機能を変化させる研究を進めています。昨年度まで、先端表現情報学コースの博士課程にて、物理的な特性を変化させるマテリアルとして液体に着目し、研究に取り組んできました。今年度からも、皆さんと一緒に魅力的な研究や作品を作っていくたいと思います！

CONGRATULATIONS

令和5年度 大学院学際情報学府 秋季学位記伝達式

2023年9月22日、学際情報学府の秋季学位記伝達式が福武ラーニングシアターで開催されました。ハイブリッドで行われた今回の式典では、修士課程8名と博士課程5名の13名に学位記が伝達されました。その後、山内祐平学府長と苗村健専攻長より祝辞が贈られました。

記事:柳 志政(博士課程・編集部)



学位記受け取り代表者の大杉慎平さん(博士、左)
とLAI ZHI HUI YASHAさん(修士、右)



令和5年度秋季学位伝達式の様子

令和5年度 秋季入学式・ガイダンス

2023年9月28日、学際情報学府の秋季入学式および入学ガイダンスが福武ラーニングシアターでハイブリッド形式で開催されました。修士課程17名と博士課程3名が出席し、山内祐平学府長と苗村健専攻長より祝辞が贈られました。山川雄司学生・留学生委員長からのメッセージも読み上げられました。

記事:柳 志政(博士課程・編集部)

合格発表

2024年2月13日、令和6年度修士課程(冬季入試)博士課程(夏季・冬季入試)(2024年4月入学)の合格者発表がありました。出願者数は修士課程192名、博士課程57名でした。最終合格者数は、以下の表のとおりです。

冬季入試・修士課程合格者数	
社会情報学コース	8名
文化・人間情報学コース	6名
先端表現情報学コース	8名
総合分析情報学コース	6名
合計	28名

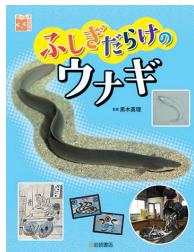
冬季入試・博士課程合格者数	
社会情報学コース	7名
文化・人間情報学コース	10名
先端表現情報学コース	13名
総合分析情報学コース	9名
合計	39名

※先端表現情報学コースは博士課程合格者数13名のうち夏季入試の最終合格者数6名



BOOKS

ふしぎだらけのウナギ



黒木真理(監修)

発行年月:2023年8月 出版社:岩崎書店

生き物としてのウナギの生物学的な知識から食文化や人の深いかかわりまで学べる、小学校中・高学年向けの教育図書。豊富な写真やイラストとともに平易な言葉で解説されていますが、内容は初步的な範疇に留まりません。新たな研究成果や養殖技術の進展、社会問題も凝縮されており、幅広い世代に手にとって頂きたい一冊です。

(准教授:黒木真理)

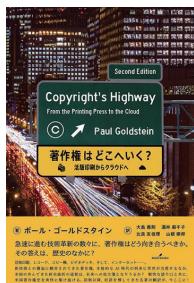


東大教授が語り合う10の未来予測

滝口友里奈(編著)／曠本純一 ほか10人(著)

発行年月:2023年11月 出版社:大和書房

それぞれの専門分野の垣根を超えて、技術・未来・社会について自由闊達に討議しました。人間拡張、人工知能、GAFA、宇宙開発、病気との闘い...「人間の能力はダウンロードできるか」「人間は1000歳まで生きられるか」「充電不要の電気自動車?」といった一見SFじみたテーマにも眞面目に議論していく、参加討議者の一人としても大変に刺激的でした。(教授:曠本純一)



著作権はどこへいく?

活版印刷からクラウドへ

ポール・ゴールドスタイン(著)

大島義則・酒井麻千子・比良友佳理・山根崇邦(訳)

発行年月:2024年1月 出版社:勁草書房

技術革新に伴い劇的に変化する現代の情報・娯楽環境に対して、著作権はどのように向き合うべきか?本書は、その時々の新技術に常に對峙し続けてきた著作権の歴史(コピー・ライト・ハイウェイ)の中にその答えがあると考えます。活版印刷からインターネットまで、ハイウェイを駆け抜ける爽快感を味わうことができる一冊です。

(准教授:酒井麻千子)



メディアテクノロジーシリーズ5

シリアスゲーム

藤本 徹(編著)

池尻良平・福山佑樹・古市昌一・松隈浩之・小野憲史(共著)

発行年月:2024年3月 出版社:コロナ社

シリアスゲームの基礎知識から具体的な開発方法、導入時の論点まで事例を交えて解説した入門書です。各分野の教育や社会課題解決のためのシリアスゲームの開発や導入を進める際の基本的な考え方、近年のゲーミフィケーションへの展開の流れなどの関連する取り組みの動向や先行事例、これまでの成果や課題を整理して論じました。(准教授:藤本徹)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

[あとがき]

これまで新学環長にその展望を伺う記事を掲載してきたニュースレター。今号でも目黒新学環長にご登場頂きました。今年1月1日に発生した能登半島地震を踏まえたタイムリーな内容。災害がご専門である故の、いまだからこそ学環学府論をぜひお読み下さい。コロナ禍で教育環境が大混乱した時期に、教育工学をご専門とする山内先生が務められた学環長のバトンが、いま目黒先生に渡される。時代との偶然の重なりも感じます。

そして、GAKKAN56号より編集に関わってこられた神谷説子先生が編集チームを離れられます。月に一度の会議やSlackで編集や進行管理を的確に進めて頂きました。お疲れ様でした。(開沼 博)

GAKKAN 62 2024.4

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員:開沼 博、神谷説子、畠田裕二、山内隆治、柳 志政

デザイン:マルヤマデザイン(丸山智也、野中優衣)